東京学芸大学紀要　芸術・スポーツ科学系　70: 65－81，2018.

造形活動を通した子ども理解の共有化に向けた基礎的知見の産出

―― 学芸の森保育園での連携造形活動と作品展の保育者と保護者のアンケート分析から ――

笠原　広一*1・真木　千壽子*2・鉄矢　悦朗*3・小室　明久*4・塚本　万里*5

美術科教育学分野

（2018年6月29日受理）

KASAHARA, K., MAKI, C., TETSUYA, E., KOMURO, A. and TSUKAMOTO, M.: Fundamental knowledge produced for sharing understanding of children through visual art activities: Based on the artistic activities and exhibitions at Gakugei-no-mori Nursery School. Bull. Tokyo Gakugei Univ. Division of Arts and Sports Sciences., 70: 65–81. (2018)　ISSN 1880–4349

Abstract

This research is a practical research on art activities and artwork exhibitions that Gakugei-no-mori nursery school and the faculty of Tokyo Gakugei University have been collaborating on. The aim is to produce knowledge that serves for sharing the understanding of children through art activities, and enhancing teachers and guardians understanding of the various sensitivities and individuality of young children. Based on the analysis of the questionnaire at the annual exhibition, the following finding was clarified. 1) Parent's comments showed that the appearance of the child and the vitality during the art activity were recalled, and an understanding of childcare, intention of the curriculum, and the intention of childcare support is inferred. 2) Childcare comments showed that understanding of children and the practice of their colleagues was promoted, and exhibitions and conferences became opportunities for communication with parents, which also becomes an opportunity to express childcare practice. This knowledge will be applicable to promoting the understanding of children through art activities in early childcare and education setting.

Keywords: Art Education, Early Childhood Care and Education, Understanding of Child, Exhibition

Department of Art Education, Tokyo Gakugei University, 4-1-1 Nukuikita-machi, Koganei-shi, Tokyo 184-8501, Japan

要旨： 本研究は大学内の保育園と大学教員が連携して取組んでいる造形活動と作品展を対象にした研究である。保育者や保護者が幼児の多様な感性や個性に気づき，子ども理解を深めていくための，造形活動を通した幼児理解の共有化の基盤となる知見を産出することが目的である。2年間の連携造形活動での作品展における保育者と保護者アンケートの分析と考察から以下のことが明らかになった。保護者においては，子どもの姿や活動中の生動感が感受され，保育や年間計画の意図，保育者による支援についての理解へと推察が広がった。保育者においては，子ども理解や同僚の実践の理解，作品展やカンファレンスが保護者とのコミュニケーションや保育実践を表現する場となることがわかった。こうした知見を取り入れて造形活動による子ども理解のためのプログラム構築をさらに進めていく。

＊1　東京学芸大学 美術・書道講座 美術科教育学分野（184-8501　小金井市貫井北町 4-1-1）
＊2　特定非営利活動法人 東京学芸大こども未来研究所 学芸の森保育園
＊3　東京学芸大学 美術・書道講座 美術分野
＊4　東京学芸大学 個人研究員
＊5　株式会社ムラヤマ

1．はじめに

本研究は2016年度から2017年度までの二年間，東京学芸大学内にある学芸の森保育園と大学教員が連携して取り組んできた造形活動と作品展の取り組みを通して，保育者や保護者が乳幼児の多様な感性や個性に気づき，子ども理解を深めていくための，造形活動を通した幼児理解の共有化のためのプログラム構築に向けた，基礎的知見の産出を目的としている。

近年の保育における造形活動の考え方は，かつての作品主義的な結果重視のものから，生活全体の文脈と密接に絡み合いながら造形活動をとおして子どもの気づきや発想，思考や試みを促進し，育ちや学びを生成していく，探究的なプロセスを重視したものへとその理解が広がってきている。レッジョ・エミリア市の乳幼児教育による芸術的なアプローチに基づくプロジェクトやそれを支えるドキュメンテーションといった生成的プロセスを捉える取り組みの普及や，プロジェクト・アプローチとともに「子どもの生活そのもの」をアートとしてとらえる「アートの生活化」（磯部・福田2015）といった各地の実践など，アートや造形活動が保育全体の考え方やその取り組みの質に与えた影響は大きい。こうした取り組みに象徴されるように，近年の保育における造形活動はプロジェクト型の探究的で生成的な実践が少しずつ広がりを見せていると言える。

一方，筆者らが連携造形活動を行っている学芸の森保育園は小規模保育園で，開園５年目と年数も浅い。造形活動だけでなく様々な保育の基盤的取り組みの整備が進められており，保育カリキュラムの構築と質的向上を目指して，大学教員との連携活動に取り組んでいる最中にある。よりよい保育のための様々な実践や考え方が多々あることは確かだが，いずれそうした発展的取り組みを進めていくとしても，まずは時間をかけて保育者とともに園全体の経験と学びの蓄積を積み上げていくことが必要な段階にある。

連携造形活動は2016年度より年間約10回程度行っており，２月には普段の保育で作られた造形作品とともに作品展も開催している。こうした取り組みの目的は，「①子どもの発達や育ち，保育カリキュラムを踏まえた必要な造形活動の実施」「②学生・大学院生にとっての学び」「③保育者への造形活動の研修」であり，作品展は「④子どもの姿や育ち，園の取り組みを保護者や地域へ発信すること」である。この協同を通して園と大学が連携し，保育の質的向上と大学の教育研究強化を図ることが目的となっている。

作品展での保護者アンケートには子どもの姿や保育者の取り組みがとてもよく伝わってくるといった声が多数寄せられた。造形活動と作品展で紹介できるのは一年間の保育の一断面ではあるが，それでも日々直接目の当たりにしている子どもの姿からは見えにくい子どもの気持ちや発想，表現に現れる感覚といった感性的な側面を垣間見ることができ，保護者や保育者にも新たな子ども理解や保育実践の捉え直しが生まれることが見えてきた。

そこで，これまで念頭に置いてきた，保育カリキュラムとしての造形活動，保育の質的向上に資する造形活動を軸にした取り組みに加え，造形表現を通した子ども理解の可能性を広げていけるような取り組みも考えていく必要があるとの考えに至った。先ほどのレッジョ・エミリアでも夜遅くまで教師や保護者によるカンファレンスが熱心に開かれている例が紹介されている（笠原，2005）。また，作品（結果）主義的な意識で作品（成果）を保護者に披露する作品展ではなく，近年はドキュメンテーションや様々な活動記録の展示や，会期中に実施される報告会なども含め，作品（展）を通して日頃の子どもたちの姿や保育実践を伝え，保護者の理解と協同的な取り組みを深めていく例も多数報告されている。複数の園で取り組んでいる自然素材での遊びの充実と描画活動とその相互循環的な深まりを，生活全体そして子どもの育ちと関連させながら把握し，展示とギャラリートークを通して保護者と対話しながら子ども理解を生み出す取り組みを行っている，子ども美術文化研究会（2012）の取り組みの例もある。

本園でのこうした取り組みはこれからであるが，幸いにも造形活動を通した子ども理解の共有化に対して，公益財団法人日本生命財団より平成29年度委託研究として「幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築」に取り組む機会をいただいた。これを契機に取り組みの具体化（実装）を図り，学術的な背景を整理し，小規模園や新設園などの保育の質的向上の向けた取り組みの参考になるような実践事例のドキュメントをまとめ，多様な子どもの個性や感性を捉え子ども理解を深めていけるような保育者や保護者のためのプログラムモデルを示していくことを目的に実践研究を進めることとなった。

そこで本論文では二年間の連携造形活動の概略を示した後，造形活動や造形作品，作品展において保護者と保育者が何を捉え，感じ，考えたのかについてアンケートから分析・考察し，造形活動による子ども理解

の深化と共有化の取り組みを進めていくための基礎的知見の産出を試みる。

本論文の構成として，2章で2016年の実践を，3章で2017年の実践の概要を示す。4章で保護者アンケートを，5章で保育者アンケートを分析し，6章の総合考察で知見を導き出し，7章で結論をまとめ，今後の取り組みのための知見を示す。

2．2016年度の連携造形活動の概要

2．1　方向性と実施体制

実施初年度ということと，外部講師として活動に入ることから，少しでも日頃の保育との関連が生まれるように意識した。当年度が0歳から入園した6歳児の卒園生を初めて送り出すこともあり，園の保育課程を完成させる段階にある中で，園長にアドバイスを受けながらまずは保育に必要な体験を造形活動面から考え，一年間の中に適切に配置していくことを第一にした。

実施体制は大学教員（笠原）と共にレギュラーメンバーとして参加する大学院生2名，その都度参加する実習経験のある学生や大学院生，後半3回と作品展には大学院の授業履修者8名が参画している。活動は大学教員が主導しつつ大学院生も一緒に活動し，時宜導入や鑑賞を一緒に計画して行ってもらうなどした。後半3回は完全に大学院生が主導する活動とした。

2．2　造形活動の様子

2016年度は10回の活動と作品展を行った。年間の活動内容は以下の通りである。

第1回：6月8日（水）クレヨンで絵を描こう
第2回：7月6日（水）○△□いろいろな形の紙で描こう
第3回：7月27日（水）粘土広場へようこそ
第4回：9月7日（水）箸置きと土のお友達をつくろう
第5回：10月5日（水）絵本をつくろう
第6回：11月16日（水）絵の具で絵を描こう
第7回：12月7日（水）靴下人形を作って劇遊びをしよう
第8回：1月16日（水）雪だるま版画をつくろう
第9回：1月30日（水）学芸の森の木を作ろう（作品展に向けた共同制作：前半）
第10回：2月8日（水）学芸の森の木を作ろう（作品展に向けた共同制作：後半）
作品展：2月16日（木），17日（金）

第1回目はクレヨンで基本的な描画を行い，2回目でクレヨンを用いつつ紙の形を変形した応用活動を行い，3回目で通常使い慣れた油粘土，4回目は土粘土を体験するなど，前半は描画や素材との出会いを重視した。夏休みを挟んで秋からは，5回目に絵本づくり，6回目に絵の具での描画，7回目に人形劇と，後半は子どもの内的世界を引き出す言葉やイメージとの対話を深める活動を行った。冬休みが明けると授業の一環で大学院生が参画し，8回目に紙版画，9～10回は作品展に向けた協同制作に取り組み，作品展を開催し実践報告を行った。

当初は園長と相談しながらスタートし，終盤にはクラス担任の保育士とも一緒に展示プランを考え，子どもたちともアイディアを出し合って作品展を開催するに至った。作品展での保護者アンケートからは作品を通して子どもの育ちが伝わってくるといった意見や，保育士からも次年度に向けた提案が寄せられた。

2．3　作品展の取り組み

一年間の連携造形活動の作品と年間の保育の中でつくられた作品とを合わせて作品展を開催する計画が持ち上がった。保育園も作品展の開催は初めてとのこと

図1　第1回「クレヨンで絵を描こう」の様子

図2　第5回「絵本をつくろう」の様子

で，連携造形活動のメンバーと後半の「美術教育研究法B」の大学院生らが参画し，保育者とのミーティングを通して展示プランを立て，下記のとおり作品展を開催した。

企画名：さくひんてん－森のなかまたち－
会　期：2017年２月16日（木）17：00～19：00
　　17日（金）９：00～15：00
会　場：東京学芸大学コミュニティセンター
主　催：東京学芸大 学芸の森保育園
協　力：東京学芸大学 笠原広一研究室，石井壽郎研究室，美術教育研究法B履修生

日々の保育や連携造形活動の作品はあるのだが，作品展を行うかどうかは当初はあまり明確ではなかった。年度の途中で日頃の作品や表現活動も充実してきているのでぜひ作品展を開催してはどうかという園長の提案を受け，年明けに作品展の実施について保育者とあらためて一緒に考え，学芸の「森」をテーマに，「森のなかまたち」というタイトルで企画を立てた。保育者と一緒に展示の会場図を描き，作品配置や展示方法を検討した。大学院生も台紙やキャプション，担当した９～10回までの実践紹介パネルを作成した。

保護者や親戚，他の幼児教育機関の教職員や学生など，二日間で約100名の来場者があった。二日目は保育園で開催された「大きくなったね会」に参加した親子が作品展にも訪れ，会場が大いに賑わった。理事長（鈇也）や園長（真木）の挨拶，大学院生の実践報告はもちろん，子どもたちも自分たちの作品を嬉しそうに保護者に紹介していた。保育者も作品を前に日頃の子どもの姿を保護者と話し，保護者からも普段の育ちが作品をとおして伝わって来るといった声が寄せられた。後日，保育者から次年度につなげるためのアイディアも出された。大学院生にとっては子どもとの造形活動を行う貴重な機会となり，保育者と一緒に子どもの育ちを表現する展示をつくる実践的な取り組みとなった。

図３　作品展チラシ（Design：塚本万里）

２．４　成果と課題

当初に目的とした「①子どもの発達や育ち，保育カリキュラムを踏まえた必要な造形活動の実施」については，年間の子どもの育ちや保育計画とゆるやかに連動しながら，季節や素材体験のバリエーションなどにも配慮しながら取り組むことができた。あまり特別な表現方法を用いていないため，保育での体験や経験と自然につながる内容になったと考える。

「②学生・大学院生にとっての学び」への貢献については，保育園には年間を通して多くの貴重な機会をいただいた。実際に子どもと関わり造形活動を行う経験はもとより，活動をとおして感じた「子ども」や「表現」を，彼らなりに自信の深いところで感受することができたことの意味は大きいと感じる。以下に一部感想を紹介する。

彼らが制作の際に見せてくれる表情はとても豊かです。友達と作りながら笑いが止まらなくなったり，粘土の感触や絵の具の色に夢中になったりする等，活動の最中に園児たちは色々なことを感じ，考えていました。展覧会によってそんな彼らの「感じ方」や「考え方」を見ることができたのではないかと思います。　（大学院生A）

展覧会では，数ヶ月を通じて築き上げた子どもたちや先生方と，大学の教員・学生との絆がそのまま形になって現れていました。私が，保育園での活動

図４　作品展の様子

を振り返るとき，最も印象深いのは「造形活動は感じるままでいい」ということです。手元にある素材の感触や，居合わせた友達や大人と交わした言葉，視線のやりとりなどに，素直に向き合ったり感じたりした結果として現れたもの全てがこの展覧会にあったと思います。　（大学院生B）

「③保育者への造形活動の研修」については夏休みに前半の連携造形活動を振り返る会を開き，普段なかなかじっくりと話すことのできない取り組みの背景や活動時の状況などを何人かの保育者と共有する機会が持てた。共に学びあう研修としていくには，もう少し計画的に準備していく必要があると感じた。

作品展での「④子どもの姿や育ち，園の取り組みを保護者や地域へ発信すること」については，普段，家庭や保育園で見聞きする子どもの姿や保育実践の印象とは異なるそれらの新たな質的側面に触れることができた機会となった。詳しくは後述のアンケートで述べるが，予想以上にこの協同を通して園と大学が連携し，子どもたちにとってより良い保育実践の充実が図られ，保育の質的向上と大学の教育研究強化が進んだ。そうした意味では初年度の目的はいずれの項目も成果が少しずつ形になって見えてきた。

一方で課題点としては，造形活動に関して初めての連携の試みであり，すでにある程度の年間計画が決まっているなかに後から組み入れたことや，担当講師（笠原）も赴任初年度であったこと，園長とは毎回打ち合わせを行えたが，勤務の合間を縫って保育者と密に打ち合わせをする時間を確保することができなかったことが課題である。十分な説明と一緒に準備に取り組むプロセスなければ共通理解に立った連携活動にはなり難い。保育者からのアンンケートでも事前の打ち合わせと共有をもっとしっかりと行うことが必要という意見が述べられており，作品展を経験してこうした取り組みの意義や可能性を共に感じてもらえただけに，今後それがより意義ある連携になるためにも打ち合わせと協働的なスタンスでの取り組みに心を砕き，次年度の取り組みを進めていく必要がある。

３．2017年度の連携造形活動の概要

３．１　方向性と実施体制

こうした2017年度の成果と課題を踏まえ，２年目も①から④の視点は継続しつつも，より保育者が保育計画や日々の取り組みの中で取り組んでいきたいと考えていることとより連動を深めながら取り組むことにした。実際のところは保育者との事前ミーティングの確保は引き続き難しかったのだが，毎回の活動終了後の反省会で次回の時期にはどんな保育を想定しているか，どんなことが子どもたちのなかで生まれていそうかなどの保育者の声を聞きながら，できるだけそれらと関連性を持った内容にしていくことに留意し，その場で次回の活動のおおまなか内容や進め方のイメージなどの情報を共有することにした。

３．２　造形活動の様子

2017年度は９回の活動と作品展，研修会・講演会１回を実施した。年間の活動内容は以下の通りである。

第１回：５月10日（水）クレヨンで絵を描こう
第２回：６月14日（水）絵の具で絵を描こう
第３回：７月12日（水）フィンガーペインティング
第４回：９月13日（水）土粘土で遊ぼう
第５回：11月18日（水）秋からのおくりもの
第６回：12月13日（水）絵本をつくろう
第７回：１月17日（水）にんじゃ人形づくりと巻物づくり
第８回：２月14日（水）にんじゃ屋敷をつくろう（作品展に向けた共同制作：前半）
第９回：２月21日（水）にんじゃ屋敷をつくろう（作品展に向けた共同制作：後半）
作品展：２月23日（金），24日（土）
研修会・講演会：１月24日（水）「子どもの造形表現の意味」

第１回目は昨年同様クレヨンで基本的な描画を行い，２回目は画用紙に絵の具での描画とし，３回目は屋外で大きなロール紙に絵の具でフィンガーペイントを行った。４回目は土粘土を体験するなど，前半は昨年同様に描画や素材との出会いを重視した。後半の５回目に屋外を散歩するなかで見つけた自然素材を用いたオーナメントづくり，６回目に絵本づくりとし，後半は昨年同様に子どもの内的世界を引き出す言葉やイメージとの対話を深める活動を行った。冬休みが明けると授業の一環で大学院生が参画し，子どもと保育者が取り組んでいる「忍者」をテーマにして大学院生が７回目には忍者人形と巻物づくりを行い，後日保育者と子どもたちが着彩して完成させた。８～９回は忍者をテーマに作品展に向けた協同制作に取り組み，作品展を開催し実践報告を行った。また，2017年10月から公益社団法人日本生命財団からの委託研究に着手し，その研修会・講演会の第一回が１月24日に開催さ

図5　第3回「フィンガーペインティング」

れ，作品展でも筆者らと保育士による年間の造形活動の説明を基に保護者との子どもアートカンファレンスを新たに開催した。

昨年の課題を引き継ぎ，限られた時間の中で少しでも保育者と事前の打ち合わせが持てるように意識したが，やはり詳細を共有するための十分な時間はなかなか取れなかった。活動の振り返りの最後に次回活動の前後で行う予定の保育や，その時期念頭に置いている活動を聞き出し，そこに関連する活動になるように計画した。

３．３　作品展の取り組み

昨年に引き続き，一年間の連携造形活動の作品と年間の保育の中でつくられた作品とを合わせて作品展を開催した。連携造形活動のメンバーと「美術教育実践論演習Ｂ（ab）」を受講する大学院生らが参画し，保育者とのミーティングを通して展示プランを立て，下記のとおり作品展を開催した。

企画名：さくひんてん－忍者の世界－
会　期：2017年２月23日（金）17：00～19：00
　　24日（土）９：00～15：00
会　場：東京学芸大学コミュニティセンター
主　催：東京学芸大 学芸の森保育園
協　力：東京学芸大学 笠原広一研究室，美術教育実践論演習Ｂ（ab）履修生

昨年の経験があるため，保育者は年間計画の中に作品展を位置づけて，秋以降，子どもたちとの間で温め膨らませてきたテーマを基に作品展を準備していた。ある程度の基本的な展示の形も保育者間で情報共有されており，保育者が展示計画をリードし，展示作業や飾り付けなども相談しながらスムーズに進んだ。今回の作品展はこれまで保育者らが子どもたちと共に取り組んできた「忍者」がテーマであった。筆者らも12月頃から忍者に関連したどのような活動がよいかを保育者と相談し，粘土などの立体工作の忍者づくりを行うことや，忍者に関連した小物として巻物づくりを行うことなど，話し合いを重ねて準備と活動を進めた。

また，大学院生との活動で全て完結してしまうのではなく，大学院生らが担当することと後日の保育で継続し発展させることができる要素を組み入れるようにし，着彩や最終的な完成に至るところは事後の保育で行えるように連携した。また，第８～９回の「にんじゃ屋敷をつくろう」では，どんな屋敷や城を作るかを保育者がイメージしていたが，再度子どもたちと相談すると，「温泉付き」などとてもユニークな意見も出てきたため，この二回は大学院生が指導者として全てを行うのではなく，保育者が先日のクラスでの話し合いのアイディアを紹介しながら制作活動のイメージを共有して膨らませ，それを一緒に実現していくという進め方に変更した。すると作っていくなかでさらに子どもたちのイメージが膨らみ，屋敷は大きな城になり，城の中にたくさんの部屋や道具の隠し部屋，城の中と外で話ができるパイプや牢屋などが作られた。大きな段ボール箱を材料にしたが，５歳児だけでなく３・４歳児も一緒に参加し，忍者ごっこも交えながら異年齢が一緒になって「自分たち」の城を作っていった。天守閣を持った一般的な城のイメージとは異なるが，子どもたち自身が作り上げた自分たちの城であった。このように，連携造形活動のメンバーと大学院生が保育者と連動し，さらに子どもたちの様々な発想やアイディアを融合させた共同制作の成果が作品と作品展に結実した。

展示期間中，保護者や親戚，教職員や学生など，二日間で昨年同様に約100名の来場者があった。二日目は作品展隣の会議室で保護者らによるフリーマーケットが開催され，手作りの手芸品などの販売が行われた。

今年はその同じ会場で初めて「子どもアートカンファレンス」を実施した。公益財団法人日本生命財団平成29年度委託研究「幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の寛容と親の学習支援プログラムの構築」の活動の一環で，昨年の保護者らの作品展から子どもの育ちや姿が見えてくるといった声や，子どもたちが自分の作品を嬉しそうに親に紹介する姿から，保育者と保護者が子どもの作品を軸に，子どもの姿や育ちを共有する小カンファレンスを催した。カンファレンスでは保育園の理事長（鉄矢）と園長（真木），連携造形活動のメンバーである筆者（笠原）と大学院生（小室），３～５歳児担当の２名の保

図6　作品展チラシ（Design：塚本万里）

育者が出席し，一年間の連携造形活動の様子をスライドで紹介し，その後保護者からの質問に答えながら，子どもの造形表現をとおして子ども理解を深めていく時間をもった。その後「美術教育実践論演習B（ab）」を履修する大学院生が7～9回の活動について実践研究報告会をギャラリートーク形式で行った。

展示も昨年は準備できなかった描画作品の月齢表示なども含め，今年はより子どもの育ちや子どもの世界，その背後が見えてくるような二日間の作品展と活動になった。造形作品やそのエピソードだけでなく保育全体の記録を含めて子どもの姿や育ちを提示する様々な作品展の実践があるのは確かだが，そこはあまり急がずに，保育者の主体的な取り組みと歩調を合わせつつ吟味しながら，自分たちで保育を豊かにしていく取り組みとして共に充実させていくことが重要と考える。大学内にあって多くの専門家が関わることができる状況にはあるのは確かだが，あくまでも日々の保育の流れの中に無理なく展開可能な形で主体的に少しずつ取り入れて，自分たちの形で作り出していかなければ取り組みは根づかない。その点では昨年の成果と課題がうまく継承され，発展的にいくつかの課題が解決されながら二回目の作品展が実現したと言える。

３．４　成果と課題

「①子どもの発達や育ち，保育カリキュラムを踏まえた必要な造形活動の実施」については，基本的には前年度の取り組みを踏まえながら，若干の追加的な内容による入れ替えや時期の移動があった程度である。初年度の課題を保育者も共有しており，大学教員の事情もあってなかなか保育者との打ち合わせを行う時間の確保は難しかったが，各回の振り返りの際に次回実

図7　作品展の様子

施時の前後の保育や予定を踏まえ，内容や方向性を確認するようにした。5歳児と3・4歳児の担任が作品展に向けた主要な役割を担うが，長期的に子どもたちと取り組んできた忍者のテーマでコラボレーションができるなど，前年を踏まえて連携がより一段深められたと言える。

「②学生・大学院生にとっての学び」では関わる大学院生が若干増えたが，昨年同様に子ども理解と造形活動の実際的な経験など多くの学びが得られている。以下に一部コメントを紹介する。

仲良しのお友達と歌いながら作ったら同じ世界を共有した連作のようになったり，ちょっと嫌なことがあってうつむきながら描いたものが哲学的な趣の作品になったり，泣きながら作っていたのに描いている内にいつの間にか笑顔になって晴れ晴れとした作品ができたり，その時々の子供達の内側にあるものが形になっていく様子が印象的でした。　（大学院生C）

忍者屋敷をつくる活動に参加しました。子どもたちが自分のからだの大きさにぴったりの段ボール箱に入り込む光景をおもしろいなとみていました。彼らの制作に寄り添う中でだんだんと子どもならではのものの見方・感じ方に私自身の感覚が馴染んでいくような気がしました。　（学部生D）

「③保育者への造形活動の研修」であるが，毎回の保育者との振り返りは保育中に行うことになるため，保育から一時離れることはなかなか難しいが，園側の協力で少しでも時間をとれるように配慮していただいた。そのため毎回保育者からの意見やフィードバックを得ながら進めることができた。特に後半の大学院生との実践では保育者からの子どもの姿を踏まえた具体的なコメントから学生は多くの示唆を得ていた。保育

者にとって自身の捉えを話すことは自身の学びにもつながるのではないかと考える。また，受託研究の一環で研修会を実施し，平田智久氏（十文字学園女子大学名誉教授），伊藤裕子氏（谷戸幼稚園園長）にご講演いただき，保育者の質問に直接答えていただいたことは，参加した保育者や職員にとっても非常に大きな学びとなったようである。日頃の取り組みや思考錯誤の中で生まれる疑問が，こうした機会の中での新しい知識や視点と出会うことで，実感を伴った理解や自信につながっていったように見える。園内のメンバー同士で様々な研修も行っているが，外部の視点が入ることで保育者らの学びはより多角的で多層的になる。今年度はこうした研修を取り入れることができたことは専門性の向上や学びに向かう意識の高まりにおいて重要な成果である。

作品展での「④子どもの姿や育ち，園の取り組みを保護者や地域へ発信すること」については，今年は「子どもアートカンファレンス」の実施が大きな成果である。実際に保育者が自らの言葉で保育を語り，保護者からの声に答え，子どもの姿や保育のあり方を共有する場が持てたことは大きな意義があった。残念ながら保育者全員が参加することはできなかったが，多くの保育者がこうした場に参加し，一緒に共有し語る機会を求めていたことは，今後，保育者（園）と保護者，大学が子どもを軸に共に保育を考え取り組みを進めていく原動力やモチベーションとなる。この成果を次年度につなげ，ぜひそうした場づくりを発展させていきたい。

こうした二年目の取り組みでは，初年度の課題がいくつかは発展的に解消されたものの，打ち合わせによる目的や趣旨の共有，作業の協働などにはまだ課題がある。しかし，研修やカンファレンスといった保育者が日頃の取り組みを語り，疑問や取り組みに講師や保護者からのフィードバックを得ていくことは，保育者の意欲や専門性にとっても重要であり，そうした点に何かしらの助力となる契機を生み出せたことは二年目の成果と言ってよい。

４．作品展での保護者アンケートの分析

このように，年間10回ほどの連携造形活動は順調に継続され，保育者との連携も少しずつ深まってきている。ここで二回分の作品展のアンケートから，保護者や保育者がこうした子どもの造形表現に関わり，またそれを目にすることで何を感じたのかについて見ていきたい。

４．１　2016年度のアンケートから

作品展を見た94名分のアンケートの質問項目は基本属性から作品展全体の印象など全８項目だが，ここでは全体の印象，印象に残った作品，感想や意見の３項目の内容を示し考察する。

Q4：展覧会をご覧になっていかがでしたか。全体的な印象をお聞かせください

まずQ4展覧会の全体的な印象では，94名中90名が「大変良い」「良い」で好印象を示している。理由には作品を通して子どもの何かが「伝わってきた」とする表現が見られた。例えば，「子どもが楽しんで作った雰囲気が伝わってきました」という「活動の雰囲気」や，「躍動感が伝わってきた」「力強さや子どもたちの可能性を感じられて良かった」とある。

保護者は普段の保育や活動の場にいることはできないが，絵や作品から，展示全体を通してそうした子どもの姿をイメージし，子どもたちの表現活動の中にある生き生きとした生動感を感じていたのである。作品は単にイメージを表象しているだけでなく，子どもたちが造形活動で体験した「あの場」の気持ちや体験の質感を感じさせるものとなっているのである。

また，「発達段階が良く理解出来ます」といった，発達に応じた表現の特性や，「意図などがわかって興味深い」といった，表現に込められた子どもの意図や願いなどが見えてくるという声もある。「自由な作品だが子どもたち一人一人の個性が見られて，とても良かった」「一人一人の表現が見える」など，同じ活動でも一人ひとりが表現しようとしたことが異なっていることや，「年齢別にバライエティ豊かな取り組み」「子ども達の成長が分かり感心しました」（その年齢に応じた刺激，働きかけが工夫されているのが良くわかりました）」といった，一人ひとりの表現から見えてくる成長とそれに応じた支援があることも見えてきたようだ。個々の作品はもちろん，年間の造形活動の形が一つの流れとなって見えてくることで，保育者や筆者らがどんな意図や計画で活動を企画し，活動内で細かな支援をしてきたか，その痕跡を個々の作品や展示の流れの中から見出すこともできたことがわかる。

そして「偶然性と子どもの感性が一つの作品となっていて良い」「一つ一つの作品と全体のテーマが一つの世界観で作っているみたい」といった，子どもの感性，場や活動の中での様々な相互作用，偶然的な創発性も含め，個々に，全体に一つの世界観が共有され，作り上げられていった年間の取り組みの総体や，テーマをもった取り組みの状況が理解されたことがわかる。

これら個々のコメントがすべての保護者にとってそうであるとは言えないが，保護者が子どもの造形表現や作品展を通じて何を感じ，理解するのかを考える際のさまざまな可能性を示唆するものであると言える。

Q5：印象に残った作品がございましたらお書きください

どちらかと言えばここでは作品についての印象がより細かく述べられていた。例えば，「子どもの視線を感じました」という，作品をとおして子どもの視線を追体験し理解したといった声や，「工夫が素晴らしい」「0，1才児の自由画に『思い切りのよさ』を感じました」「材料も自分たちでみつけているところが良い」「えほん（内容がみんなしっかりしていて素晴らしいです）」「子どもたちの個性のあるつけ方でそれぞれ表情がちがい，かわいい」といった，各活動での子どもの表現感覚や具体的な工夫を見出している。また，「0～2才児が筆を持っている所を想像しただけで，幸せな風景が浮かび嬉しくなってしまいます。3～5才児には芸術を感じました」といった，先ほどの活動の雰囲気や体験している子どもの気持ちについて想像が喚起されたといった声もある。

Q7：子どもたちの作品や園での造形活動について，ご感想やご意見があればお書きください

「子どもならではの自由な発想が目に見える形で現れるのがおもしろい」といった，造形表現によって子どもの発想が具体的な形を伴って視覚化されるということや，「造形活動を通して，自分の顔や生き物や身近な物をよく観察して理解していくんだなぁーと思いました」からは対象を見つめる子どもの中に起こっていることが伝わって来るといった声，「自由な想いを迷いのないまっすぐな手の動きを通じて，作品一つ一つが生き生きとしているようです。大変感動しました」「朝の10分位のわずかな時間でも，ハサミで切ったり，絵も描いたり創作している子どもを見て，日頃の活動を垣間見るような気がします。思ったことひらめいた事を形にする力をどんどん育てて欲しい」からは子どもたちが普段の保育の中で手を動かして何かを描いたり創り出したりする取り組みが子どもたちにとって大切な活動であるといった保護者の認識や，「心の中の風景を思い切り表現できる環境はすてき」など，そうした取り組みを日々の保育の中で行っていくことへの期待が述べられている。「子どもたちも自分の作品が飾られていてとても嬉しそうでした」といった声からは，作品展の会場で自分の作品を保護者に紹介する子どもの自信に満ちた嬉しそうな姿が浮かんでくる。作品や展示全体から保護者が感受し，読み取って理解するものや，作品展の会場での我が子の語りやその姿から感じられるものや見えてくるものがあるようである。

4．2　2017年度のアンケートから

二回目の2017年度の作品展でのアンケートの三項目への回答を見てみよう。昨年は作品展の二日目に「おおきくなったね会」という一年間の育ちを保護者に見てもらう子どもたちの園生活の発表会があったため，多くの保護者が作品展の会場へとそのまま移動し，短時間のうちにアンケートを回収することができた。しかし今回はそうした条件はなく，保護者は二日間の展示期間中に少しまばらに訪れ，二日目にはカンファレンスもあり，保護者も保育者や筆者らと話す場面もあったため，昨年ほどアンケートは回収できず，34件であった。

Q4：展覧会をご覧になっていかがでしたか。全体的な印象をお聞かせください

まず全体的な印象では，34名中34名が「大変良い」「良い」で好印象を示している。理由には「子供の自由な発想や作品に性格が出ていて面白い」「子供達の園での生活が想像できる色づかいや形でたのしいです」「どれものびのびと楽しく制作したんだろうなという雰囲気が伝わってきました」「年間の活動のストーリーとそれぞれの意識が改めて分かり，まとめて観る良さを実感しました」「忍者のテーマや日常の保育が表現につながっていて作品にたくさんのエピソードが透けて見えました」のように，昨年も子どもたちの活動時の気持ちや意図，場の雰囲気や取り組みの様子が「伝わってきた」という声があったが，今年もそうした声が複数見られた。

作品からその当時の，その背景にあるものが様々に「透けて見える」という表現は興味深い。作品や展示という「モノ」を媒介・契機にして，保護者が知っている家での子どもの姿や，見聞きする園での様子などの断片が，モノの形や色，ストーリーや雰囲気と結びついて，作品展の背景映像として立ち現れるということであろう。作品や展示という「モノ」が持つ想像力を喚起する力である。

Q5：印象に残った作品がございましたらお書きください

昨年とは違って具体的な作品についての印象が述べられていた。例えば，「秋からの贈り物：土台から一

人一人違う形で，素材の選び方・形などもとても個性的で素晴らしいと思った」「忍者のお城：忍者のお城の工夫が思いがけない発想があちこちにあり面白かったです」「忍者のお城：子供たちが楽しそうに造っている姿が目に浮かびました」「絵本：ストーリーの構成を自分なりに考えるのは大変に楽しいことかと思ったので」など，コメントの内容はQ4にある印象がどの作品から特にそう感じたのかを特定するようなものが記されていた。

Q7：子どもたちの作品や園での造形活動について，ご感想やご意見があればお書きください

その他感想や意見では，「からだ全部を使った活動をこれからもたくさん経験できると嬉しいです」「日ごろ色々な物を作っているのがわかってよかったです。家ではできない材料や方法で作れるのは，想像力が広がっていいなと思います」「自由にやっている雰囲気が伝わってきてとても良いです。昨年のビー玉ころがしも良かったのでまたやってほしいです」など，普段家ではできない内容についての要望などもあり，今年までの取り組みの中で印象的だったものも挙がってきている。

また，「カンファレンスの感想も含めて，子供たちが作品をつくるごとにお互いに意見交換したり発表をしたり，大人も様々な視点の人が意見交換することで想定外の波及効果が得られて良いと思いました」「子どもそれぞれの気持ちを大切にしつつ作らせることを応援して頂きありがとうございました」といった意見や，カンファレンスもあったため昨年以上に子どもたちが作品をつくっている時の様子やそこでの体験の意味などを踏まえた感想も寄せられている。

４．３　保護者アンケートの考察

2016年度と2017年度の作品展では，展示の考え方と大学院生による実践研究報告があることは同じだが，当日の園での活動の有無やカンファレンスの実施に違いがあり，アンケートの数も異なり，同じようには比較できない。しかし，2016年度の作品展を経験した多くの保護者が作品や展示をとおして子どもの気持ちや考え，普段の取り組みの姿を想像し理解することができることが少しずつ共有されているように見える。特に2016年度の最初の作品展のアンケートでは，保護者が作品と作品展を通して見たもの，感じたもの，想像したものが，子どもに関するものから保育の取り組みに関するものまで，幅広く述べられていた。また，作品を通してエピソードなどの背景にあるものが「透けて見える」といった声も，作品や展示という視覚的な「モノ」が背景にある様々な子どもの姿の断片を統合し，背景映像を喚起させる契機となることも，造形表現と作品展の大きな強みであり，子ども理解の可能性を広げる示唆に富む意見である。

昨年の作品との比較を述べた感想などもあった。子どもたちや保育者，連携造形活動のメンバーの顔ぶれも毎年少しずつ変わっていく。いくつかの基本的活動は同じものだが，実際の活動の過程や生まれてくる作品は変わってくる。毎年の保育の取り組みや蓄積に保護者も関心と理解，期待と応援を寄せていることがわかり，子どもを軸に園と家庭が協同で子育てに取り組む関係性の深まりを感じさせる。

こうした協同的な取り組みと関係性の中で，連携造形活動や作品展，それらを契機とした保育者と筆者ら，園と保護者，園と大学との連携が進化・深化していくとすれば大きな意味がある。保護者からの感想や意見などのフィードバック，カンファレンスでの対話の場づくりはまだ始まったばかりだが，子どもを軸に園と家庭の協同による子育てや子ども理解の深まりに向けた今後の取り組みを模索する上で，作品展での保護者の声から，多くの示唆を得ることができた。

５．保育者アンケートの分析

次に，作品展終了後に保育者に行った二年分のアンケート計７件（2016年度４件，2017年度３件）を合わせて見ていく。

５．１　保育者アンケートの結果

Q2：先生の普段の造形活動への取り組みはいかがですか

・よく行う方だ	(0)
・わりと行う方だ	(3)
・あまり行わない方だ	(4)
・ほとんど行わない方だ	(0)
・回答無	(0)
	（合計７件）

造形活動への取り組みは，「わりと行う方だ」「あまり行わない方だ」が多い。「わりと行う方だ」と答えた理由では「クレヨン画，フィンガーペインティングなどで自由に表現することを好む子が多く」「いろいろな体験を一緒にしたかったので」がある。「あまり行わない方だ」でという回答では「行事にひっかけて行うことが多かったので，月に一回程度となっていた」

ように，行事で制作する機会はあるが，それ以外にはなかなか機会を設けていないといった声や，乳児では「遊びの中で，『素材に触れ合う』」といったねらいで行っており，何か作品を作るという意味での造形活動とは分けて捉えている意見もあった。(0・1歳児での)クレヨン画，フィンガーペインティングなどの素材体験的なものと，2才以上では行事などの機会に制作物をつくる活動に大きく分けられるようである。

Q3：作品展に取り組まれていかがでしたか

2016年度は初年度であり途中から作品展の計画が具体化したこともあり，「全体のイメージがあまりわかなかったのですが，完成したものはステキでした」といった意見があった。開催後は「保護者が子どもの作品にゆっくりと目を向ける機会になりよかったと思った（普段から保育室に飾っているが，忙しい中で見たり，送迎に来る人だけがみたり，という形だったので)」といった意見など，作品展が保護者の保育や子ども理解のための新しい機会になると感じている。

2017年度の二回目では年間を通したテーマ「忍者」があり，「テーマがしっかりとあり，幼児クラスは年間を通して同じテーマで行事が進んでいたので，作品展でも表現できていてよかった」「他のクラスの作品をゆっくりと見る良い機会にもなったし，保護者とは日々の情報の共有でいっぱいいっぱいだが，ゆっくりと造形について話せた」「一年間の忍者の取り組みを造形を通して表現できた。保護者の方々にも忍者がテーマになった流れや製作の様子なども見て知っていただく良い機会になった」など，保護者に子どもたちの一年の取り組みを知ってもらい，そのことで保護者と話し，保育者同士も他クラスの活動を知る機会になっているという。つまり，作品展を通して「子どもや保育の取り組みを知ってもらい，それについて話し，保育者同士も互いの取り組みを知る機会を作ることが出来る」と捉えていることがわかった。

Q4：今回の取り組みで印象に残ったことがありましたら教えてください

保育者にとっては作品展への取り組みでどんなことが印象に残ったのだろうか。2016年は初年度で事前に十分な仕組みを作ることができずにスタートしたこともあり，十分に保育者との打ち合わせが持てないままに進んだことは否めない。それでも作品展一ヶ月前に保育者と園長と筆者らでミーティングを開き，保育者と共に作品展への関わり方や方向性，内容についての話し合いを持つことができた。「テーマを話し合いながら保育士が提案してくれたこと（職員の主体性が発揮できてよかった)」といった声はそうした状況を表していると考える。また，テーマとなった「学芸の森の木」でも「バラバラの作品が2週かけて一つの大きな作品となっていく過程が面白かった」「とても伸び伸びしていた。『子ども時代を子どもらしく』そのものであった」「学生さんの頑張りとクオリティの高さ」など，子どもや学生と共に形にしていくことや，協同で取り組む造形活動で見せる子どもの姿が印象深いとする声がある。先の質問への回答にあるように，園で今まで行っていない活動となったことで，今までとはまた違った姿が見られたのだろう。

2017年は昨年のイメージがあるため，活動のより具体的な点にコメントが寄せられた。テーマは「忍者」で巨大なお城を協同制作したが，「製作途中の作品の置き場を考え，普段の遊びの中でも少しずつ作ることが出来ると良いと思った」「個々での製作が一つに合わさる瞬間が見られた。自分で製作した物への愛着が強く，特別な場所や物に思う姿が見られたこと」など，作品展に向けた造形活動が普段の保育と連動を深めたり，普段の姿を知る保育者だからこそ捉えることができた子どもの姿が述べられていた。このように印象に残ったことは，普段の子どもの姿と作品展（造形活動）で見えてくる子どもの姿との間のつながりと違いが見えてくる点にあるようだ。

Q5：子どもたちのことや表現・作品等で気づいたことや発見したことはありましたか

作品展で子どもたちの様子や表現・作品に関して気づいたことや発見したこととしては，造形活動の喜びを感じている乳児の姿や「学年ごとの成長が分かり良かった」，子どもが自分の作品について語る場面で「それぞれのストーリーや思いがあり，それを話せていることに驚いた」「巻物や分身人形にはそれぞれの忍者のイメージ（黒だけで色を塗ったり，しぶめの色を選択したり）を表現しようとする姿が見られた」といった意見，2歳児でも「親に伝える姿」が見られたことなど，子どもの姿や子ども理解に新たな気づきが得られた点が挙がっている。

「幼児の作品は大きいものがあり迫力があった」「楽しみながら作っているんだろうな，というのが作品から伝わってきた」「自然物を取り入れた作品も，あたたかみがあってよかった」のように，「子どもの作品の持つ魅力」や，子どもが楽しんで作っていたことが伝わって来ること，作品のあたたかみのように保育者が作品からその子を感じたり，活動中のその子の気持

ちや状況をイメージしていることである。保護者のアンケートにもあったが，作品がその背景にある子どもの姿を喚起させたり，作品そのものの何かしらのイメージや質的なものを感受したり想起しているということである。

このように，保育者が作品展を通して子どもたちの様子や表現，作品に関して気づいたことや発見したこととは，子どもの姿や子ども理解に新たな気づきが得られた点と，作品そのものの何かしらのイメージや質的なものを感受したり，想起している点である。

Q6：今回の進め方について良かった点と改善すべき点を教えてください

今回の進め方について良かった点と改善すべき点では，2016年度は「作品展を行うことが年間計画に入っていなかったので準備がバタバタとなってしまった」「大きなテーマ決めを早めに行うべきだった。またテーマ決めは作品作りの中心となる子ども・保育者の意見を第一に考えてもよかった」「担任が打ち合わせに必ず入り，子どもたちの主体性を引き出せる取り組み方等について話せるといい」など，年度途中に作品展の計画が立ち上がったことや，保育者と十分な連携が取れずに進んでいた点が改善点である。一方で開催一ヶ月前ではあったが保育者との話し合いを持ったことで「どのように展示したいのかをしっかり聞いてくださったことで，自クラスのブースがイメージ通りでした」や，「第一回ということであればとても良かった」というところにまで最後は何とか着地した。課題が多かったことは事実だが，「ワークの中で学んだことを，職員の中で共有し，普段の保育の中で活かせるといい」といった声など，日々の保育と月一回の連携造形活動では立場も回数も異なるが，同じ子どもを軸に保育にかかわる者同士として，日々の連携と信頼関係，学び合いを深める中で進めていけるように少しずつ改善していくことが必要である。

2017年は前年のイメージもあるため準備はスムーズになり，「忍者人形や巻物等，メインのお城以外でも忍者をテーマにした造形があったのがよかった」「一つひとつの作品に作っている時の写真を一緒にしたり，エピソードを書いてもよかった」といった，作品展をより良くするためのアイディアも出された。「製作担当学生と事前にしっかりと打ち合わせを行う時間を作る。一週間前には指導案が用意できれば準備物などを集める余裕ができたと思う」といった意見は，昨年の問題点の改善を進めてはいたものの未だ十分ではないため，次年度も改善を進めていく必要がある。

このように，今回の進め方について良かった点と改善すべき点から見えてきたのは，年間を通して，また作品展に向けた保育者との話し合いと連携を深めていくことが，よりよい保育と作品展を通した保護者や保育者相互の子ども理解の深まりを生み出し，意義ある協同を生み出していけるようになるということである。

Q7：次回，作品展を行うとすれば，取り組んでみたいと思うことはありますか

2016年度は，乳児向けの「参加型の物やしかけ」「普段の保育では行うことが出来ないこと」や「0歳～5歳までの作品を合わせて一つの作品にする」といった意見が出た。2017年度は乳児も含めて「園全体で一つの作品を作る。例えば園庭や植物園の絵を，土台は幼児クラス，植物や昆虫，鳥を乳児クラスが作り，はり合わせると一つの絵になるなど」「今回は3，4，5歳児で共同製作のお城を作ったのだが，乳児クラスもその一部を作成したり，製作をつけたりして，園児全員で取り組めるようにしても良いと思う」のように，昨年に続き園児全員で作る活動が，より具体的なイメージで提案されている。昨年はそうした具体的な記述はなかったが，今年は前年とは違ってより見通しを持った中で作品展に向けての取り組みに関与していたため，活動をとおして保育者にも「このような活動にしてみたらよいのではないか」といったアイディアが具体的に湧き上がっていたようである。そして「作ったものを見せることも大切だが，作っている過程を見てもらうことも大切だと思う（ビデオで録画したものを見てもらうなど）」といった意見もあった。作品を見せるわけだが，それは子どもの姿や育ち，保育を見せているのであり，作品という形あるモノの背景にある過程も伝えていきたいという声が現れている。年間の活動のドキュメンテーションや映像記録の活用なども含め，次年度は話し合いを密にして共にアイディアを出し合いながら進めていくようにしたい。

このように，次回，作品展を行う際に取り組んでみたいことは，園児全員での協同制作と保育や連携造形活動の過程も展示で見せる発信の仕方の充実ということである。

Q8：今後，教員や院生等による定期的な造形活動を行うなかで取り組んで欲しいことがあれば教えてください（理由もお願いいたします）

「普段触れることが少ない素材を使用した造形活動」はもちろんだが，「片付けも一緒に行う（筆の洗い方

など…)」という意見にもあるように，時間が押して園児たちの昼食の準備と重なり，片付けの全てが終わらずに保育者にお願いすることになってしまったケースもあれば，終了後すぐに振り返りの時間が迫り，園側で用意した道具の片付けなども一緒に行えない状況もあった。初年度ということや，終了後に授業の準備がある学生もいるなど，そうした作業を保育者側で行うといった遠慮（ある種の気遣い）が園長にもあったかもしれない。しかし連携して取り組んでいくとすれば，保育者側ときちんと協同的なスタンスで取り組む関係と形と意識を共有していく必要がある。保育は止まることのない流れの中にあるのであり，時間や作業のこともしっかり考えて行う必要がある。

2017年度での意見としては，先の質問の回答とも同様に「皆で何か一つのものを作る」があるが，ここでもより具体的に「今年度のようにクラスの活動や子どもたちの好きなことを取り入れた活動」「広い場所でいっぱいの造形活動（理由：人が多くないとできない活動のため。環境構成や展開も勉強したい)」「お城作りのように完成物が想像できないような，子どもたちが自由に製作できる活動」といった要望が出ている。つまり，今までにあまり行ってきていない活動で，広い場所や人数が要るもの，今回の活動で経験したような子どもたちのイメージが活動を主導するような取り組みなど，子どもたちに新たな体験の可能性を開くものや，保育者にとっても挑戦的で学びにつながるようなものが挙がっている。

活動計画の打ち合わせの際に，保育者からの要望を引き出すと，保育者にとっての試みにもなる活動要素が含まれ，ともに実践に挑戦し，振り返り，その意味や姿を考えながら，最後にはカンファレンスや作品点で保護者にも伝えていくコレボレーションができるかもしれない。

Q9：その他，感想やご要望等がありましたらお願いいたします

感想や要望としては，初めて作品展ができたことで，そこまでの一連の流れのなかで，普段行っている造形活動の捉え方が変わったり，作品展自体が子どもも保護者もワクワクするものとなったり，「展示期間がもう少し長いと良い」といった感想が寄せられた。

Q9：今年初めて取り組んだ，子どもアートカンファレンスについてはいかがでしたか。ご意見ご感想お願いいたします（2017年度追加項目）

先に述べたように2017年度は作品展会期中に子どもアートカンファレンスを実施し，保護者に対して日々の造形活動や連携造形活動の様子をスライドで紹介し，保育士も交えながら話し合う場を設けた。しかし予想外にその時間中に子どもの保育を行う必要が出てきて，全ての保育者が参加できなくなったことが非常に残念であった。園の近くにある大学のコミュニティセンターが作品展の会場であり，保護者と子どもの状況が必ずしも予測できるものではないため，状況に応じた対応が必要になることはあるのだが，ここまでのアンケートにもあったように作品を介して保護者と話す機会を保育者はとても楽しみにしていたようである。カンファレンスに出席できた保育者も感想では全員が参加できなかったことを挙げていただけに，保育者にとってこうした機会がいかに重要なものかがわかる。次回のカンファレンスでは是非とも解決したい。

５．２　保育者アンケートのまとめ

ここまで2016年度と2017年度の二年間の連携造形活動と作品展の取り組みに対する保育者アンケートを考察してきた。まず園での造形活動への取り組みは，未満児では感触を楽しんだりと日々の園生活での感覚的な体験を広く造形活動の範疇としてとらえるなど，発達に相応しい形での取り組みを意識しており，年齢が上がるにつれて行事に関連した取り組みでの造形活動が盛んになる。作品展では日々のクレヨンや水彩絵具での自由画，折り紙や画用紙での工作なども多数展示されており，実際には様々な造形活動が年間をとおして行われていることがわかる。

連携造形活動自体が2016年度から始まり，作品展の計画も年度途中で立ち上がったこともあり，打ち合わせなどの日々の連携体制構築が十分ではなく，連携造形活動や作品展も保育者がどのようにかかわるのか，そこに日々の保育がどのように関連していくのかなど，見通しを持ち，主体性を発揮してかかわることに課題を感じていたようである。二年目にもそうした問題は引き続き検討が必要となっている。

作品展そのものは，保育者も全クラスの取り組みを一同に見ることができ，子どもの発達や成長を作品をとおして捉えることができる機会となった。特に二年目には日々の保育やその取り組みを保護者にも伝えたり，保育を「表現」していく機会として作品展を意識している声も聞かれ，作品を介して保護者と話すことができる貴重な機会となることが複数の意見から見えてきた。毎日のお迎えの際の短い時間では伝えきれないことを展示という一連の取り組みが一同に見渡せる機会に共有したいと考えていることがわかった。保護

者の意見にもあったように，それは作品として目に見えるものを媒介にして，見えない子どもの気持ちや意図，普段の姿などを，イメージを想起させながら共有し合う機会になる。それはカンファレンスも同様であり，すべての保育者に参加してほしかったという多数の声は，保育者が子どもの姿や育ち，自分たちの保育を，保護者や多くの人々に伝えたい，理解してほしいと願う気持ちの表れであろう。「展示期間がもう少し長いと良い」といった意見やカンファレンスへの期待は，保育者にとって展覧会が保護者に伝える子どもの姿や育ち，保育を伝えていける有効な取り組みであることが実感を伴って理解されてきているからではないだろうか。取り組みたい実践の一つひとつを具体化していくには年数がかかるが，少なくとも保育者が考えている潜在的な願いや意欲，期待がこうした取り組みを契機として具体化されていくとすれば意味がある。連携造形活動と作品展はその一端を具体化する契機ともなり，子ども，保護者，保育者，園をつなぐ，コミュニケーションのメディアとなり，場となり，機会となりつつあると言えるのではないだろうか。

６．総合考察

６．１　作品展と保護者との間に生まれたもの

造形活動と作品展の取り組みは，かつての作品主義的な目的や内容から，子どもの育ちや日々の保育の文脈を伝え共有する目的へと変化してきた。先に述べたレッジョ・エミリア市の幼児教育を紹介する展覧会「子どもたちの100の言葉」展（2001年）は，作品やドキュメンテーションを通して知を探究する学習者としての子どもの姿や「学びの場の可視化」（Filippini, 2011: 287），共有・発信の方法として造形活動と作品展への注目を高めた。そして展覧会の可能性とは「施政者や教育者，父母や市民などに，子どもの文化に対して目を向けるように促し，議論の場を提供する」（p.286）ことであり，「個々人が鑑賞する際の，考察および自己考察という緊張感にこそ，もっとも大きな価値がある物語なのです」（p.287）という。保護者や保育者は作品を観るなかに，作品の背後にある子どもたちの姿やその生動感を「皮膚感覚的」に感じとっている。そして，そこに繰り広げられる子どもたちの表現

表１　作品展で生まれた保護者の感受認識

作品展で生まれた感受認識	場の文脈状況に関するもの	子ども個人に関するもの	保育者の援助や保育に関するもの
皮膚感覚的に感じたもの	〈2016〉 ・活動や場の雰囲気 楽しんで作っていたことが感じられる 〈2017〉 ・自由にやっている雰囲気が伝わってきてとても良いです。	〈2016〉 ・活動中の子どもの生動感 躍動感、力強さ、思い切りの良さ、可能性 〈2017〉 ・どれものびのびと楽しく制作したんだろうなという雰囲気が伝わってきました 。	―
状況,内容,意味理解的に見えたもの （子ども個々の状況）	〈2016〉 ・発達段階が見える。 ・成長が見える。 ・子どもならではの自由な発想が目に見える形で現れるのがおもしろい。 〈2017〉	〈2016〉 ・成長が見える。 ・子どもの意図がわかって興味深い。 ・工夫が素晴らしい。 ・材料も自分たちで見つけているのが良い。 ・一人一人の個性。 ・偶然性と子どもの感性が一つの作品となっていてよい ・造形活動を通して自分の顔や生き物や身近な物をよく観察して理解していくんだなあ一と思いました。 ・自由な想いを迷いのないまっすぐな手の動きを通じて、作品一つ一つが生き生きとしているようです。大変感動しました。 ・子どもたちも自分たちの作品が飾られていてとても嬉しそうでした。 〈2017〉 子供の自由な発想や作品に性格が出ていて面白い。 ・絵本：ストーリーの構成を自分なりに考えるのは大変に楽しいことかと思ったので 。	〈2016〉 ・心の中の風景を思い切り表現できる環境はすてき。 〈2017〉 ・日ごろ色々な物を作っているのがわかってよかったです。家ではできない材料や方法で作れるのは、想像力が広がっていいなと思います 。 ・カンファレンスの感想も含めて、子供たちが作品をつくるごとにお互いに意見交換したり発表をしたり、大人も様々な視点の人が意見交換することで想定外の波及効果が得られて良いと思いました 。 ・子どもそれぞれの気持ちを大切にしつつ作らせることを応援して頂きありがとうございました 。
状況,内容,意味理解的に見えてきたもの （多くの作品を並べて観ることで対比的に見えてくる）	―	〈2016〉 ・自由な作品だが一人一人の個性が見える。	〈2016〉 ・年間の造形活動の形が一つの流れになって見える。 ・年齢別のバラエティ豊かな取り組み。 ・年齢に応じた刺激、働きかけの工夫。 ・成長に応じた支援。 ・作品と全体テーマの世界観。 〈2017〉 ・年間の活動のストーリーとそれぞれの意識が改めて分かり、まとめて観る良さを実感しました。
発展的に想起,推察されたもの （上記の統合的発展）	〈2016〉 ・0-2歳児が筆を持っているところを想像しただけで、幸せな風景が浮かび嬉しくなってしまいます。3-5歳児には芸術を感じました。 〈2017〉 ・子供達の園での生活が想像できる色づかいや形でたのしいです。 ・子供たちが楽しそうに造っている姿が目に浮かびました 。	〈2016〉 ・朝の10分くらいのわずかな時間でも、ハサミで切ったり、絵も描いたり創作している子どもを見て、日頃の活動を垣間見るような気がします。思ったことひらめいた事を形にする力をどんどん育てて欲しい。	―
		〈2017〉 ・忍者のテーマや日常の保育が表現につながっていて作品にたくさんのエピソードが透けて見えました 。	

活動に取り組む姿の状況をイメージし，その実践の持つ内容や意味を理解するのである。その理解とは作品を見ている中でおのずと「見えた」もの，つまり「状況，内容，意味理解的に見えたもの」もあれば，状況と内容から子どもにとっての活動の意味や保育の意図などが推察されたという「状況，内容，意味理解的に見えてきたもの」もある。そして，それらが統合的に結びつき，さらにイメージや子どもが表現することの価値などを考えるに至るような「発展的に想起，推察されたもの」が生み出されてくる。こうした保護者の声を整理すると表１のようになり，そこから抽出した作品展で生まれた感受認識とは図の四つとなる（図8）。

図８　作品展で生まれた保護者の感受認識の分類

６．２　作品展と保育者との間に生まれたもの

次に作品展をとおして保育者との間に起こったことについての感想や意見にはいくつかの観点がある。初めて作品展を経験する保育者もおり，作品展ができていくプロセス自体が興味深いものであることといった，「作品展を実施したことについて」や，一年間の取り組みが具体的に見える，表現することができるという「保育に関する」観点，子どもが持っているストーリーや作ったものへの愛着といった「子ども理解に関する」観点，子どもの造形作品のバラエティーの豊かさといった「造形作品に関する」観点，普段なかなかゆっくりと保護者と話す機会がなく，作品に目を向けてもらうことが難しいが，こうした機会をとおし

表２　作品展で生まれた保育者の感受認識

感想や意見の観点	内容　（コメントが複数観点を含む者は分割して示している）	
作品展を実施したことについて	・全体のイメージがあまりわかなかったのですが、完成したものはステキでした 。 ・バラバラの作品が2週かけて一つの大きな作品となっていく過程が面白かった 。	・作品展に向けた活動と過程の面白さ。
保育に関して	・テーマがしっかりとあり、幼児クラスは年間を通して同じテーマで行事が進んでいたので、作品展でも表現できていて良かった。 ・一年間の忍者の取り組みを造形を通して表現できた…。 ・個々での製作が一つに合わさる瞬間が見られた…。	・テーマを持って取り組んできた中での子どもの姿や保育が表現できた。
子ども理解に関して	・「子ども時代を子どもらしく」そのものであった。 ・…自分で製作した物への愛着が強く、特別な場所や物に思う姿が見られたこと 。 ・学年ごとの成長が分かり良かった 。 ・それぞれのストーリーや思いがあり、それを話せていることに驚いた 。 ・親に伝える姿 。 ・楽しみながら作っているんだろうな、というのが作品から伝わってきた 。	・表現や制作の中にある子どもの気持ちや物語が見える。 ・子どもが言葉で伝える姿が見える。 ・子どもが感じている楽しさが伝わってきた。
造形作品に関して	・とても伸び伸びしていた。 ・巻物や分身人形にはそれぞれの忍者のイメージ（黒だけで色を塗ったり、しぶめの色を選択したり）を表現しようとする姿が見られた 。 ・幼児の作品は大きいものがあり迫力があった 。 ・自然物を取り入れた作品も、あたたかみがあってよかった 。	・自分なりにイメージを持って表現していることがわかる。 ・予想を越える作品のもつ質感や力を感じた。
保護者とのことに関して	・保護者が子どもの作品にゆっくりと目を向ける機会になりよかったと思った（普段から保育室に飾っているが、忙しい中で見たり、送迎に来る人だけがみたり、という形だったので）。 ・…保護者とは日々の情報の共有でいっぱいいっぱいだが、ゆっくりと造形について話せた 。 ・…保護者の方々にも忍者がテーマになった流れや製作の様子なども見て知っていただく良い機会になった 。	・保護者に作品をゆっくり見てもらう機会になった。 ・保護者と保育や活動の背景についてゆっくり話す機会が持てた。
保育者同士のことに関して	・他のクラスの作品をゆっくりと見る良い機会にもなった…	・他のクラスの作品が見れた。
園全体のことに関して	・製作途中の作品の置き場を考え、普段の遊びの中でも少しずつ作ることが出来ると良いと思った 。	・普段の取り組みの改善。
その他のことに関して	・学生さんの頑張りとクオリティの高さ。	・学生との協働。
良かった点と改善点	・作品展を行うことが年間計画に入っていなかったので準備がバタバタとなってしまった 。 ・大きなテーマ決めを早めに行うべきだった。またテーマ決めは作品作りの中心となる子ども・保育者の意見を第一に考えてもよかった。 ・担任が打ち合わせに必ず入り、子どもたちの主体性を引き出せる取り組み方等について話せるといい。 ・どのように展示したいのかをしっかり聞いてくださったことで、自クラスのブースがイメージ通りでした 。 ・第一回ということであればとても良かった 。 ・ワークの中で学んだことを、職員の中で共有し、普段の保育の中で活かせるといい 。 ・忍者人形や巻物等、メインのお城以外でも忍者をテーマにした造形があったのがよかった 。 ・一つひとつの作品に作っている時の写真を一緒にしたり、エピソードを書いてもよかった 。 ・製作担当学生と事前にしっかりと打ち合わせを行う時間を作る。一週間前には指導案が用意できれば準備物などを集める余裕ができたと思う 。	・改善点

てそうした保護者とのコミュニケーションが図れるといった「保護者とのことに関して」の観点，そして他のクラスの作品をゆっくりと見れるといった「保育者同士のことに関して」の観点，園での造形活動のあり方を考える「園全体のことに関して」の観点，その他，学生の頑張りといった「その他」の観点，様々な改善点はもちろん，やってみることでわかったことや良かったことといった「良かった点と改善点」の観点である。保育者からのコメントを観点別に整理したものが次の表2であり，それらを大きく分類すると，「場の文脈状況に関するもの」と「保育者の援助や保育に関するもの」，「子ども理解に関するもの」に分けられる（図９）。

平田（2010）は大人（保育者や保護者）が子どもの造形表現とかかわることはNonverbal（非言語）な子どもの気持ちや表現の過程を捉え，論理性だけではない個人的・主観的で答えがさまざまな「心の動き」に応答的に関わり，子ども理解の契機となるとする。造形表現の「目の前にある」という特性によって「じっくりと作者（子ども）に向き合うことが可能」となり，「時には一人の子どもの作品を全部並べてみたり，クラスの子どもたちの絵を並べてみる」ことで「育ち方や関心事などの個性が見えてきたりと“子ども理解”に役立」ち，「目の前の子どもの姿を率直に語りあったり喜びを共有できること」で「保育者と保護者との真のかかわり」となる関係を築くことができ，子育て支援や親との連携につながるとする（p.124）。つまり，造形表現とその共有は，言葉にならない子どもの「表現」を感じ取る機会となり，子ども同士，保育者同士，保育者（園）と保護者との間で共有され，造形作品（活動）という「もの」とのかかわりと同時に，共感をとおした，人と人とのかかわりや相互理解を生み出すのである。保育者のコメントを詳しく見てみると，造形活動や作品展においてそうした共感や相互理解に至る姿が実際に生まれていることが確認できる。

図９　作品展で生まれた保育者の感受認識の分類

７．結論

以上のアンケートの分析と観点の抽出から，連携造形活動と作品展の取り組みを通して保護者と保育者が感受し認識したことは次のようにまとめることができる。

・作品展は，保護者も保育者も全クラスの取り組みを一同に見ることができ，発達や成長を捉える機会となった。
・作品展は日々の保育を保護者にも伝えたり，保育を「表現」する機会として意識されつつある。
・先行研究が示すとおり，作品展は作品を介して保護者と話すことができる機会となることが確認できた。
・作品として目に見えるものを媒介にして，見えない子どもの気持ちや意図，普段の姿などを，イメージを想起させながら共有し合う機会になる。
・カンファレンスの機会とは保育者が子どもの姿や育ち，自分たちの保育を保護者に伝えたい，理解してほしいという願いを浮き彫りにし，そうしたコミュニケーションの契機となりえる。
・連携造形活動と作品展の取り組みは保育者が持っている潜在的な保育への取り組みの願いや意欲，期待が具体化される契機となりえる。
・文脈を視覚化することの有効性はもちろん，作品といった「もの」が物語るということ，「もの」によって大人が想像力を喚起させられる点も重要である。
・作品や作品展は，子どもと大人，保育者と保護者などの「あいだ」に想像と共感を生み出す媒介・契機になる。

これらの結論は本園での連携造形活動におけるローカルな知見であり，すべての保育と造形活動の実践に当てはめて語れるものばかりではない。しかし，既に示されている造形活動や作品展の意義や有効性を理解するといったことではなく，それを参照し学びながらも，目の前の保育の現場に即した形で必要な取り組みを模索し，一つひとつ活動を積み上げながら自分たちの保育を作り出していくことが重要である。

連携造形活動は参加する子どもたちにとってはもち

ろんのこと，学生や大学院生らの学びだけでなく，保育者の学びや新たな挑戦，潜在的な願いや意欲，期待も引き出していける魅力ある取り組みであると言える。そうした取り組みは保護者にも普段眼にすることのできない子どもの姿，個性や感性を感じさせ，保育の豊かさを感受し理解する機会となる。そうした造形活動を軸にした子どもの造形表現との出会いを通して，保育者や保護者はいつもとは異なる子どもの姿に出会い，新たな子ども理解へと開かれていくのであり，その過程で自分自身の子どもに対する眼差しも少しずつ変化していくのである。

今回のアンケートの分析と考察から見えてきたのは，造形活動をとおした子ども理解をめぐって，保育者と保護者が感じたものや認識したことが何であったのか，ということであり，そのことが連携造形活動のいかなる意義を浮かび上がらせたのかということであった。この取り組みを継続して深化・発展させていく上で基盤となる重要な知見をいくつか得ることができた。

この取り組みを今後も継続しながら子ども理解を開いていく実践をより豊かに展開し，その実践理論をよりわかりやすく伝えられるように研究を進めていきたい。

謝辞

ご協力いただいた特定非営利活動法人東京学芸大こども未来研究所の皆様，学芸の森保育園の職員及び保護者の皆様，子どもたち，東京学芸大学美術分野石井壽郎教授に御礼申し上げます。本研究は「公益財団法人日本生命財団 平成29年度委託研究（課題名：幼児教育における子どものアート活動を媒介とした多様性の涵養と親の学習支援プログラムの構築）」によるものです。委託研究事業に際しては財団事務局の皆さま，研修会・講演会講師をお引き受けいただいた平田智久先生（十文字学園女子大学名誉教授），伊藤裕子先生（学校法人裕学園谷戸幼稚園園長），研究支援課及び学系事務室の皆様のご支援，ご協力に心より御礼申し上げます。

そしてこの二年，運営実施に一緒に取り組んだ大学院生及び学部生に心より感謝申し上げます。

2016年度実施協力者：小室明久，塚本万里，東南さゆり，笹川萌，包海清，齋藤真智子，清水結佳理，竹美咲，張心怡，松井素子，林ももこ，黒田千紘，荒木みどり。

2017年度実施協力者：小室明久，塚本万里，蠣崎夏帆，加山総子，松尾美沙，平石亘，松下光，大迫千昌，小島真由子，和田賢征，池田晴介，高橋美花，内山望，井上扇里。

付記

本論文は下記学会発表をもとに加筆修正と考察を加えたものです。

笠原広一，真木千壽子（2018）「造形活動を通した幼児理解の共有化の取り組み」日本保育学会第71回大会 2018年5月12日（土）・13日（日）宮城学院女子大学.

文献

Filippini, Tiziana（2011）「展覧会をとりまく会話」佐藤学監修・ワタリウム美術館編『驚くべき学びの世界：レッジョ・エミリアの幼児教育』ACCESS CO., LTD. 286-293.

平田智久・小林紀子・砂上史子（2010）保育内容表現，ミネルヴァ書房.

磯部錦司・福田泰雅（2015）保育の中のアート：プロジェクト・アプローチの実践から，小学館.

子ども美術文化研究会（2012），子どもが生み出す絵と造形：子ども文化は美術文化，エイデル研究所.

笠原広一（2005）「イタリア，レッジョ・エミリア国際会議2004：幼児教育の現在・芸術教育の未来」瓜生通信（30），京都造形芸術大学瓜生通信編集委員会，12-17.